

Denodo グローバル クラウド調査 レポート 2022

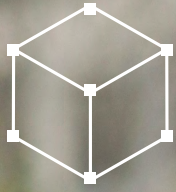


提供:



目次

はじめに	4
クラウドデプロイ、クラウドプロバイダー、IT部門の役割	6
クラウドの導入、動機、課題	9
主なクラウドの取り組み	12
データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用	15
データ駆動型企业への壁	19
調査手法	23
Denodoプラットフォームの概要	24
スポンサーについて	26



はじめに

クラウドは未来の技術ではなく、当たり前存在になっています。

2021年にはパンデミックが原因で、オンライン限定の事業へ軸足を移す企業が多数確認されました。また、レストランなど従来の実店舗によるビジネスから、オンラインで注文と配送を処理するようになった例も見られます。こうしたビジネスの要がクラウドです。不安定で予測できない市場の浮き沈みへの対応に必要なクラウドの拡張性をさまざまな企業が評価し、やがては依存するようになりました。

2022年が始まって数か月が経ちましたが、この傾向は続いています。もはやパンデミックは対処法のない未知の存在ではなくなりましたが、世界的な終息にはほど遠い状況です。クラウドが単に不確定な世界でサービスを提供するための便利な代替手段にとどまらず、継続的に柔軟性を維持する上で欠かせない存在であることを、パンデミックは思い出させてくれます。

グローバルなサプライチェーンの問題、サイバーセキュリティの脅威、不安定な国際情勢に直面する中で、クラウド化に向けたビジネス変革は企業にとっての最優先事項です。こうした環境で柔軟性とレジリエンスを確保するため、規模と業種を問わずクラウドへの移行が行われています。特に中小企業では、ワークロード移行、データストレージサービス、クラウドネイティブなアプリケーション開発に対応する目的でクラウドインフラサービスへの投資が加速しています。

Denodoグローバルクラウド調査2022では、業種もクラウド化への取り組みの進捗もさまざまな150以上の組織を調査しました。

調査の目的は、各企業の課題、クラウド化の動機、クラウド化に何を期待するかを把握することです。また、データ統合、データ管理、アナリティクスワークロードにどのようなクラウドテクノロジーを利用しているかも調査対象です。さらに、現在実行中の取り組みと、将来計画している取り組みにどのような種類があるかも調査しています。回答者はクラウドテクノロジーとクラウドサービスの潜在顧客であるため、評価と選定の基準、好み、購買プロセスにも着目しました。

想定通り、2022年の調査ではクラウドテクノロジーが広く普及していることが確認されました。また、レポート機能、ダッシュボード機能、セルフサービスによるデータアクセス機能への関心が高まっています。このことから、すでにベンダーの選定とクラウド移行は完了しており、取り組みの重点がどうやって適切な情報を適切な相手に適切な時間で提供するかに移っていると考えられます。その目的は、非常に予測が難しいビジネス環境で自社の重要ニーズを満たすためクラウドの新たな能力を活用できるようになることです。

主な結論

クラウドテクノロジーは現代のデータインフラの基本要素に進化しました。企業の現在の関心は、新たなクラウドシステムを上手く利用して自社のデータを最大限活用することです。Denodoグローバルクラウド調査2022の調査結果から得られた重要な洞察を以下に示します。

クラウドの急速な導入が続いています。その背景には、パンデミックによって変化したデータの利用・配信形態が当たり前の存在になったため、クラウドテクノロジーへの関心が持続している現状があります。大半の企業が何らかの形でクラウド活動に取り組んでいるため、今年の調査では「様子見」の企業が大幅に減少しました。また、54%の回答者がクラウド導入の成熟度を「中級」または「上級」と回答しており、多くの企業がかなりの成熟を達成しています。

最も多いデプロイモデルはハイブリッドクラウドの37.5%で、3年連続の首位となりました。この結果はクラウドテクノロジーを導入するとしても、オンプレミスシステムが使われずに放置されることはないという事実を示すものです。テクノロジー環境が変化する中でもオンプレミスシステムを簡単に廃止しないのは、法規制への準拠といった納得のいく理由が多数存在するためです。論理データファブリックのような最新のデータ管理アプローチを使用すると、レガシーシステムをシームレスに順応させ、クラウドシステムと併用できるようになります。

クラウド市場では長年Microsoft AzureとAmazon Web Service (AWS) が他を圧倒しています。2020年と2021年にはAzureがAWSをわずかに上回りましたが、今年はAWSが首位を奪還しました。

クラウド刷新に取り組む際のIT部門の役割が変化しています。昨年はクラウドプロバイダーの選定と移行管理が主な仕事でした。しかし今年は、組織のクラウドシステムを次のレベルへ導くべく訓練を受けています。これにより、セルフサービスによるデータアクセスが、ビジネス関係者にとって身近な機能となるでしょう。調査結果が示す通り、クラウドテクノロジーの2大ユースケースは、「レポートとダッシュボード」および「セルフサービスBIとアドホック分析」です。

今年の調査では、クラウドベースのデータウェアハウス、データレイク、レイクハウスが最多の取り組み（48.2%）と最多のユースケース（57.3%）となり、重要な位置を占めました。明らかに、重要ワークロードのクラウド移行が完了した後は、多くの企業が新しいデータの保存先を探してからデータの収集を開始しているのです。

調査対象の企業について

本調査ではさまざまな業界の150社以上を調査しました。たとえば、ソフトウェア/IT、金融サービス、ヘルスケアなどの業種が含まれます（回答者の属性の内訳は『調査手法』セクションをご覧ください）。また、回答者の役職はクラウド/データアーキテクト（25%）、諸々のエンジニアリング職（12.55%）、経営幹部（11.31%）などです。その他にも、データサイエンス、ビジネスアナリスト、ライン部門のリーダーといった役職から回答がありました。

設問の最初のセクションでは、プロバイダーとデプロイモデルの選択に関して、調査対象企業の基本的な特徴を明らかにします。また、調査対象企業が導入サイクルのどの段階にあるかや、クラウドテクノロジーの購買プロセスにおける各回答者の役割についても調査します。

1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

データ駆動型企業への壁

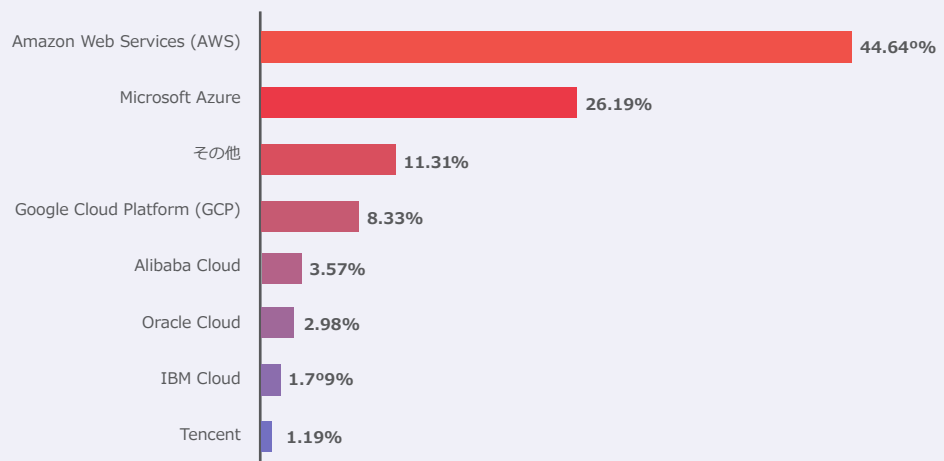
1

クラウドデプロイ、クラウドプロバイダー、IT部門の役割

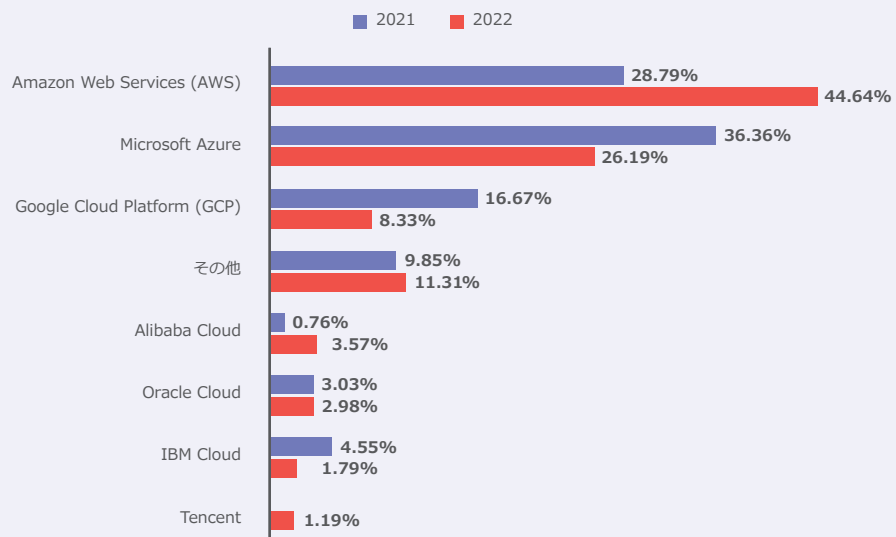
選択したクラウドプロバイダー

引き続き、Microsoft AzureとAmazon Web Service（AWS）が大差をつけて市場を支配しています。ただし、過去2年はAzureがAWSをわずかに上回っていましたが、今年はAWSがシェアを伸ばしAzureを引き離しました。また、今年はGoogle Cloud Platform（GCP）のシェアが2021年の14.9%から8.3%に後退しています。対照的にAlibabaは、2021年の1.4%から3.6%にシェアを伸ばしました。

主要クラウドプロバイダー



主要クラウドプロバイダー（2021年 vs 2022年）



1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

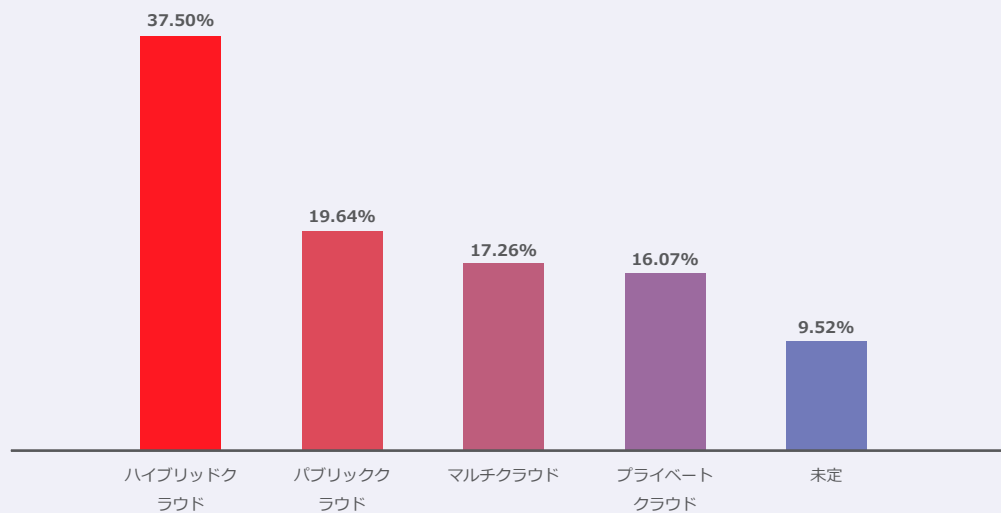
データ駆動型企業への壁

デプロイモデル

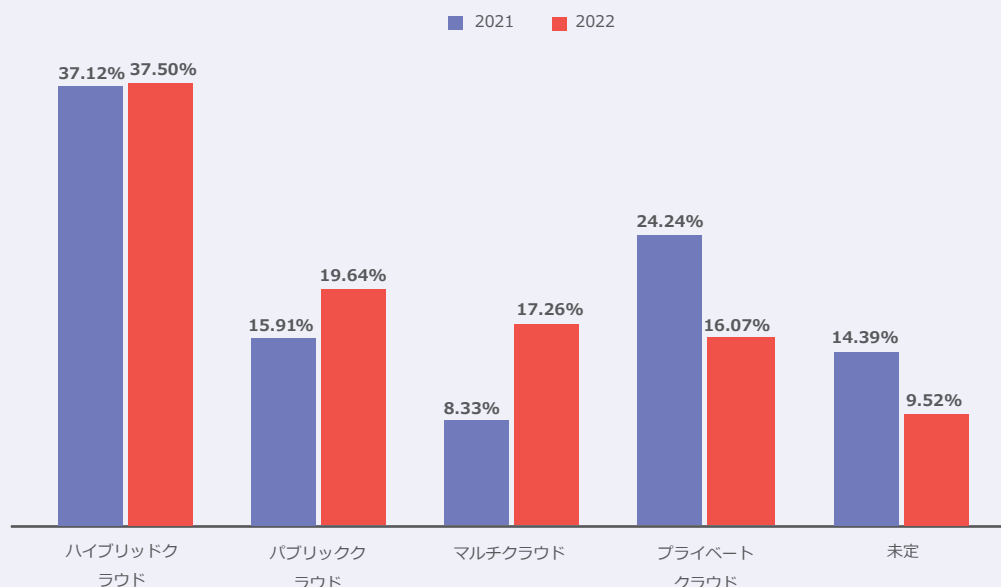
2020年から引き続き、デプロイモデルとしてはハイブリッドクラウドが好まれています。ただし今年、2番人気のパブリッククラウドと比べて2倍近くの票を集めており、大きく差を広げました（ハイブリッドクラウドが37.5%に対し、純粋なパブリッククラウドが19.6%）。今年の調査では、ハイブリッドクラウドは「好ましい選択肢」というより、現代のデータエコシステムの中核に企業が必要とする厳しい現実である、ということが明らかになっています。

2020年から引き続き、デプロイモデルとしてはハイブリッドクラウドが好まれている

クラウドデプロイモデル



クラウドデプロイモデル（2021年 vs 2022年）



1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

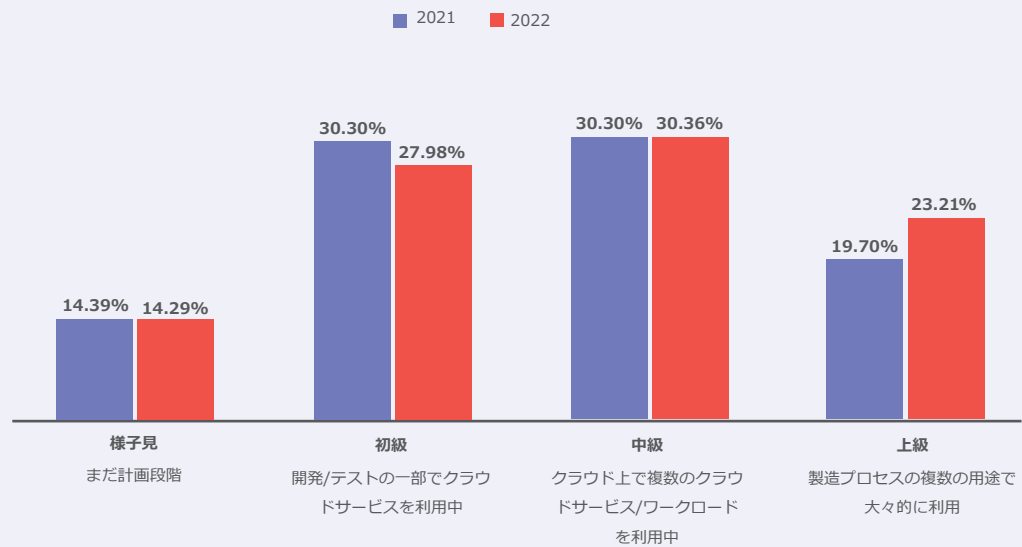
5

データ駆動型企業への壁

クラウド導入の成熟度

クラウド導入の成熟度は上昇が続いており、「様子見」が微減、「初級」、「中級」、「上級」が増えたという結果になりました。

クラウド導入状況（2021年 vs 2022年）



クラウド導入の成熟度は上昇が続いている

1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

データ駆動型企業への壁

2

クラウドの導入、動機、課題

次の設問グループではクラウドの導入に注目し、「クラウドテクノロジーを導入する動機と手段」に関する企業の状況を明らかにします。

クラウドの導入と成功を妨げる主な壁

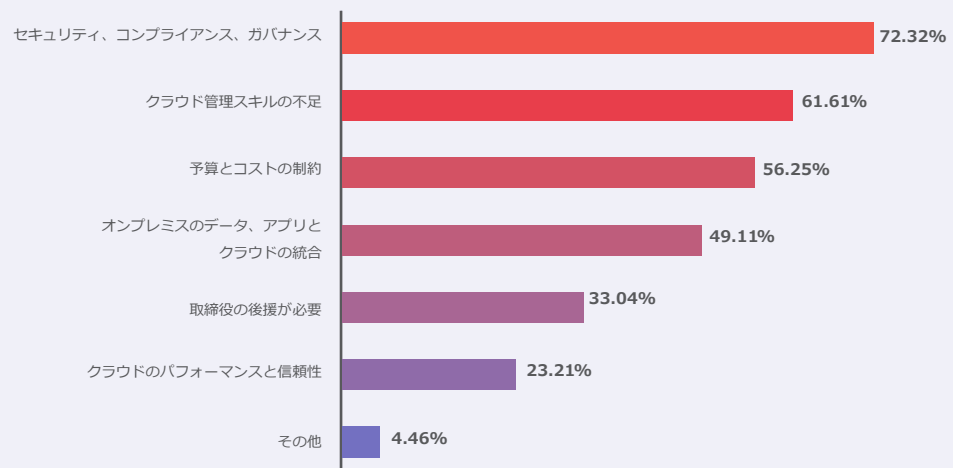
ほとんどの企業がクラウドテクノロジーに関わり、クラウド化に向けた取り組みの中で成熟度を高めています。依然として壁は存在します。それどころか壁は現在も非常に高く、「セキュリティ、コンプライアンス、ガバナンス」が引き続き最大の懸念事項となっています（72.2%）。また、2位は「クラウドシステムを管理するスキルの不足」（61.6%）でした。しかし、市場はこの課題に積極的に対応しており、資格とスキルを持つ数万人のエンジニアによるクラウドセンターオブエクセルレンスのプラクティスをグローバルなシステムインテグレーターが構築しています。この動きは中小企業分野でのクラウドテクノロジーの導入に後押しされたものです。

クラウドへ初めて移行する際は、決まってセキュリティ、コンプライアンス、ガバナンスに悩まされます。オンプレミスシステムとクラウドシステムの全容を広い視野で可視化することを要求される上、両システムにセキュリティとガバナンスの規約を実装するシームレスな手法が必要となるためです。幸い、こうしたニーズは論理データファブリックなどの最新の戦略で解決できます。

同様に、初めて移行する際はクラウドシステムの管理も必ず問題となります。とりわけ、データインフラにクラウドシステムを新規追加した場合は、まず上手くいきません。適切な戦略を導入しなければ、クラウドシステムとオンプレミスシステムをまとめて管理するのは困難です。そして、ここでも論理データアーキテクチャが有効であり、クラウドシステムとオンプレミスシステムの管理を同時に簡素化できます。

資格とスキルを持つ数万人のエンジニアによるクラウドセンターオブエクセルレンスのプラクティスをグローバルなシステムインテグレーターが構築

クラウドの導入と成功を妨げる主な壁



1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

データ駆動型企業への壁

クラウドテクノロジーを導入する主な動機

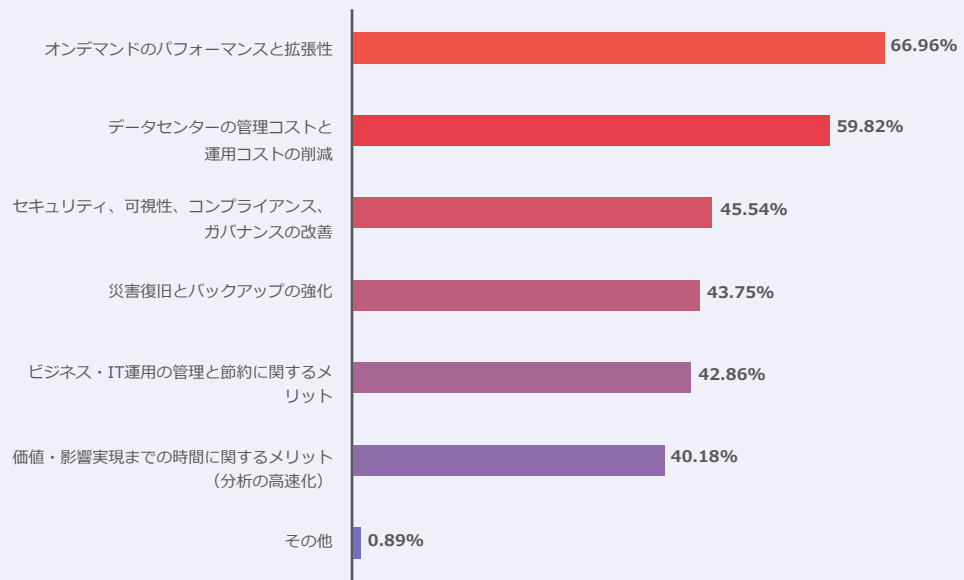
課題をよそに企業はクラウドテクノロジーの導入を継続しており、現代化されたインフラの基本要素となるまでクラウドテクノロジーに固執し、取り組む構えです。避けられない課題はあるものの、クラウドテクノロジーには良く知られたメリットが無数に存在します。たとえば、ビジネスのニーズ次第で必要に応じてパフォーマンスとストレージを簡単に拡張できることなどです。2022年にワークロードのクラウド移行を後押ししている主なメリットは何なのでしょう。

企業がクラウドテクノロジーを導入する動機となっている2大メリットは、「オンデマンドのパフォーマンスと拡張性」（67%）と、「データセンターの管理コストと運用コストの削減」（59.8%）でした。この2つが他の理由を大きく引き離しています。

この結果から、企業は現在も「パフォーマンスを高めながらコストを抑える」という基本に魅力を感じていることが示唆されます。幸い、この2つはクラウドテクノロジーの得意分野です。

クラウドを導入してワークロードを移行させる主な動機

パフォーマンスとコストがクラウドを導入する2大動機



1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

データ駆動型企業への壁

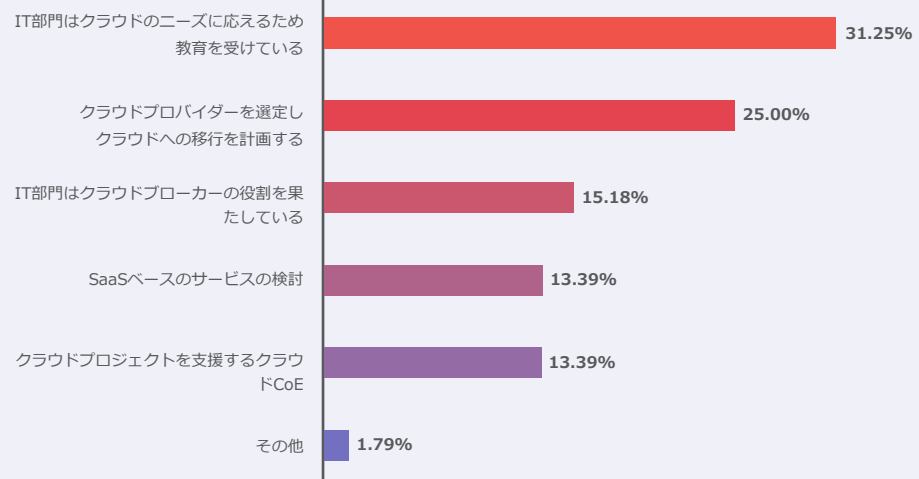
企業のクラウド戦略におけるIT部門の役割

2021年の調査では、IT部門の主な役割は「クラウドプロバイダーの選定と移行の計画」でした。そして、「増加するクラウドのニーズに応えるため教育を受ける」が僅差で2位でした。今年の調査でもこの2つの役割は依然として重要であり、1位と2位を占めていますが、「増加するクラウドのニーズに応えるため教育を受ける」がクラウドプロバイダーの選定を6.25%上回りトップとなりました。

このデータは、クラウド化への取り組みの中で企業が昨年よりも成熟していることを表します。多くの企業がプロバイダーの選定を終わらせ、移行を始めているのです。今ではクラウドを最大限活用することが求められており、言い換えれば、重要なユースケースを解決する活動の開始に焦点が移っています。もはやIT部門は単純労働者ではなく、ビジネスの友としてIT部門、ライン部門、執行部門を橋渡しする存在なのです。

クラウド戦略におけるIT部門の役割

IT部門はクラウドの導入を完了させ、企業のクラウドニーズに応えるための教育に注力している



1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

データ駆動型企業への壁

3

主なクラウドの取り組み

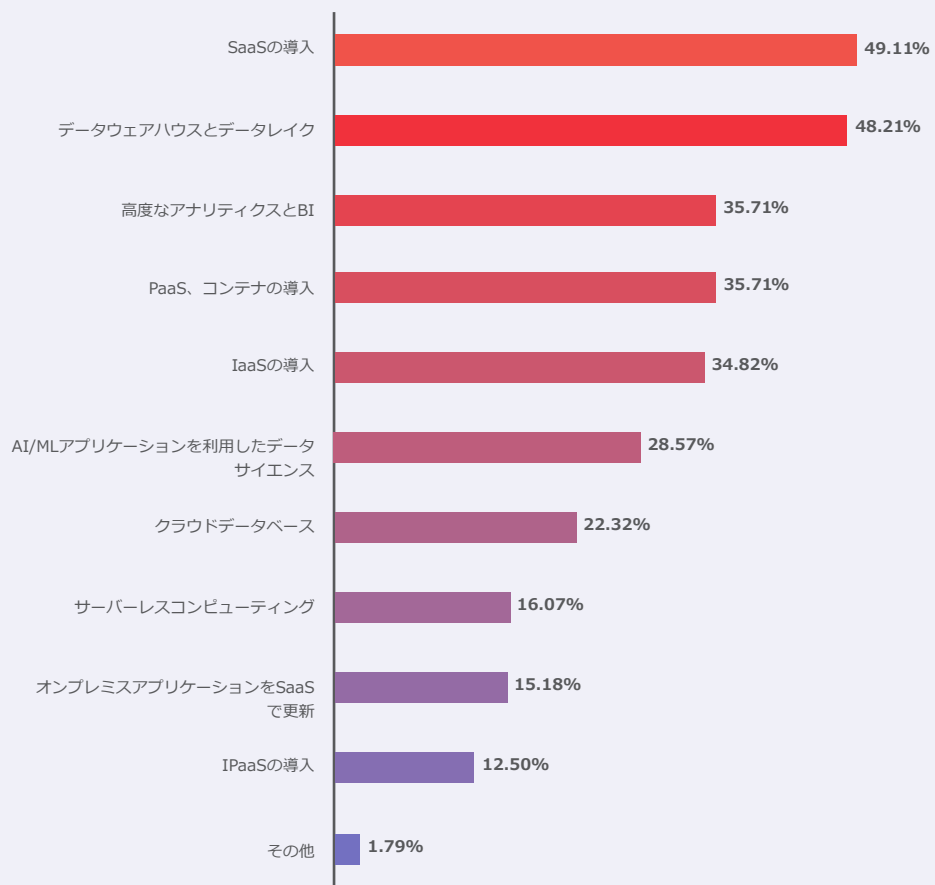
企業はさまざまなユースケースに対応すべくクラウドテクノロジーを導入しています。では、クラウドテクノロジーを利用して2022年に実行される取り組みは何が主流なのでしょうか。

特に多かった2つの取り組みは、「サービスとしてのソフトウェア（SaaS）の導入」（49.1%）と、「データウェアハウスとデータレイク」（48.2%）です。

ハイブリッドモデルが普及しているものの、3年連続でSaaSに大きな注目が集まりました。これは、多くの企業が巨大なオンプレミスアプリケーションから、柔軟性が向上する「軽量な」SaaS型へ重要機能を移行している可能性を示すものです。今回の調査では、回答者がクラウドベースのデータウェアハウスとデータレイクに2度言及しているようで（2つ目は後述の「クラウドサービスとしての重要データアプローチの評価（使用中）」）、「新しいデータを収集するようだが、どこに保存するのか？」という共通のジレンマを感じていることが示唆されます。

SaaSアプリケーションの導入率が従来から上昇しており、データストレージとロケーションが優先度の面で僅差の2位となった

主なクラウドの取り組み



1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

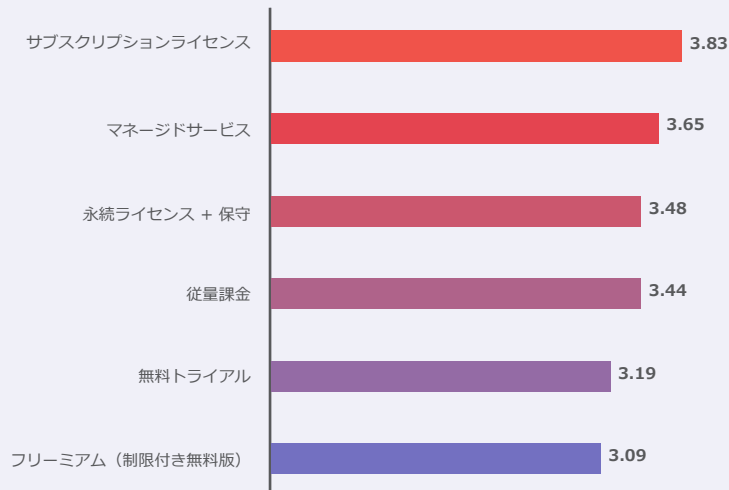
データ駆動型企業への壁

好まれるライセンス方式

クラウドテクノロジーには多様なライセンスの選択肢があり、調査結果でも回答者の関心はさまざまです。とはいえ、サブスクリプションサービスを提供することが「重要」、「やや重要」、「非常に重要」、「不可欠」だと90%以上の回答者が感じており、サブスクリプション形式が好まれているのは確かです。また、重要分野の実装では、簡易で表面的な機能への関心が薄く、長期的に幅広い機能を扱える多機能ツールがより多くの関心を集めました。

クラウドデータ統合、アナリティクス、管理ワークロードに採用したいライセンス方式（加重平均）

企業はサブスクリプション方式を好むが、購入前の試用を望む



クラウドベンダーのプログラムの利用状況

シームレスな拡張性、保守費用の不足、柔軟な価格設定など、お馴染みのさまざまな理由で企業はクラウドテクノロジーを導入しています。パンデミックの影響の1つとして、インフラ用ハードウェアの不足と価格の不安定化の危険が生まれました。その結果、多くの大企業が多年度にわたる大規模なクラウド契約を行い、先行割引を確定させる動きが加速しています。その結果、すべての主要クラウドプロバイダーで受注残が大幅に増加しており、全世界の合計では数千億ドルに達します。これに伴い、企業はクラウド契約を最大限活用しようと試みており、サードパーティによるソフトウェアとセキュリティの販売チャネルとしてのクラウドマーケットプレイスの重要性が増しています。

この状況は、主要クラウドベンダーが提供する多様なインセンティブプログラムから確認できます。2022年に企業が利用するプログラムを見ていきましょう。

1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

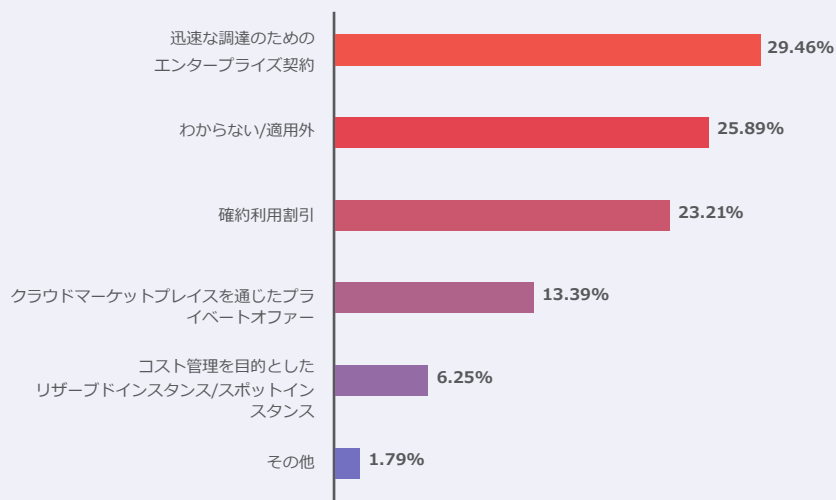
5

データ駆動型企業への壁

最も多くの回答者が利用するプログラムは、迅速な調達を約束するエンタープライズ契約でした（29.5%）。この手の契約を履行する容易さを考えると、驚くには値しません。興味深いことに、次に多かった回答は「分からない」（25.9%）でした。上手くPRできていないインセンティブプログラムが少なくないと考えられます。そして3番目に多かった回答は「確約利用割引」（23.2%）で、「分かりやすく簡単に利用できるのであれば、ユーザーはインセンティブプログラムを利用するものである」という行動様式を裏付けるものです。

企業がクラウドを導入する方法としては、エンタープライズ契約と確約利用割引が最も一般的

クラウドベンダーのプログラムの最新利用状況



1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

データ駆動型企業への壁

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

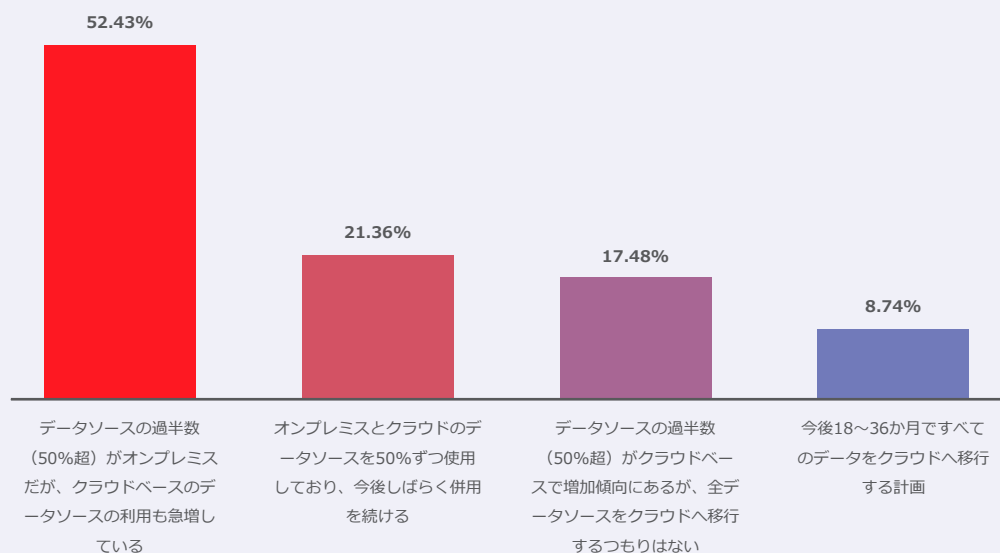
設問の4番目のセクションでは、データ統合、データ管理、データアナリティクスに着目し、企業による実際のクラウド利用状況を調査しました。

クラウド/オンプレミスの併用

上の「調査対象の企業について」セクションで述べたように、本調査では3年連続でハイブリッドクラウドモデル（クラウドとオンプレミスの両方にデータを保管するモデル）が最も好まれるデプロイモデルとなっています。

大部分の企業がクラウドデータソースの重要性の高まりを認識している一方で、調査対象企業の多く（38.84%）が今後しばらくはオンプレミスデータソースとクラウドデータソースを併用すると明言している点は注目に値します。近日中に全データをクラウドへ移行する予定の企業は8.74%しか存在しません。

現在クラウドベースのデータソースを利用しているか、今後利用を計画している回答者の割合



さまざまなクラウドとオンプレミスにデータを分散させる傾向が強まっている



1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

データ駆動型企業への壁

データウェアハウスやその他のデータリポジトリの数

企業は大規模なリポジトリを複数デプロイする傾向があります。リポジトリの種類としては、データウェアハウス、データマート、運用データストア、データレイク、データレイクハウスなどが存在します。

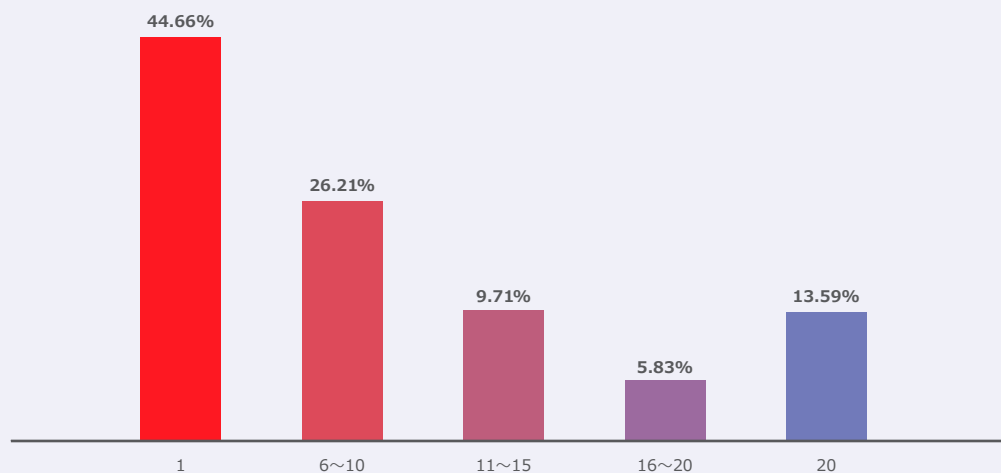
複数のリポジトリをデプロイする理由は、すべてのリポジトリが同じではなく、それぞれに特有のユースケースが存在することを企業が認知しているためです。また、クラウドの導入も大きな追い風となっています。

大半（44.7%）の企業は1～5個のリポジトリを利用する比較的小規模なインフラを運用しています。また、大量のリポジトリを管理する企業としては、6～10個のリポジトリが最多で26.2%存在します。興味深いことに、次に多かったのは20個超のリポジトリを管理しているという回答で（13.6%）、11～15個や16～20個の企業を上回りました。

この結果から、大半の企業は少数のリポジトリで満足しているものの、非常に多くのリポジトリから成る多様性の高いインフラを採用する企業もほぼ同数存在することがわかりました。

データリポジトリ数

回答者の55.34%が6個以上の運用データリポジトリを使用



1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

データ駆動型企業への壁

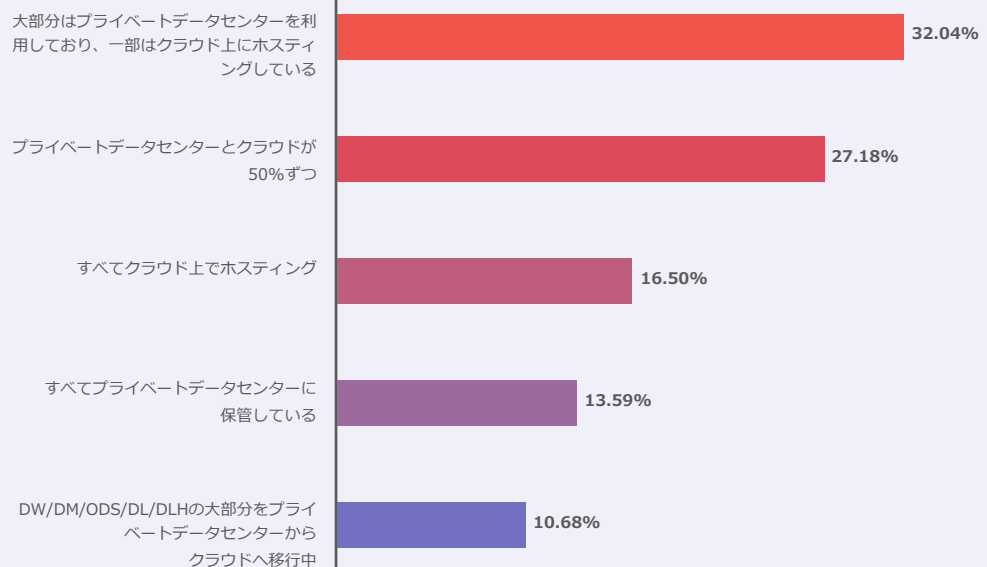
企業リポジトリのデプロイ先

クラウド/オンプレミスの併用に関する設問の回答データから、59.2%の回答者がクラウドシステムとオンプレミスを何らかの形で併用するシステムを利用していることが判明しています。このうち、データの大部分をプライベートデータセンターに保管し、少数をクラウドに保管している企業が32%、オンプレミスとクラウドのリポジトリを50%ずつ使用している企業が27.2%でした。

回答者の圧倒的多数（86.4%）がクラウドシステムを利用しているか、利用を計画しています。全データをプライベートデータセンターに保管しているのは13.6%にすぎません。

一部またはすべてのデータリポジトリがクラウド上に存在する企業が86.4%

リポジトリのデプロイ先（計画を含む）



検出、アクセス、分析できないデータの量

時にデータサイエンティストはデータの分析よりもデータの検出、アクセス、準備に多くの時間を費やすことが知られています。さらに、クラウドを導入した結果、データの大部分にアクセスし分析できない状況が生じているのです。

1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

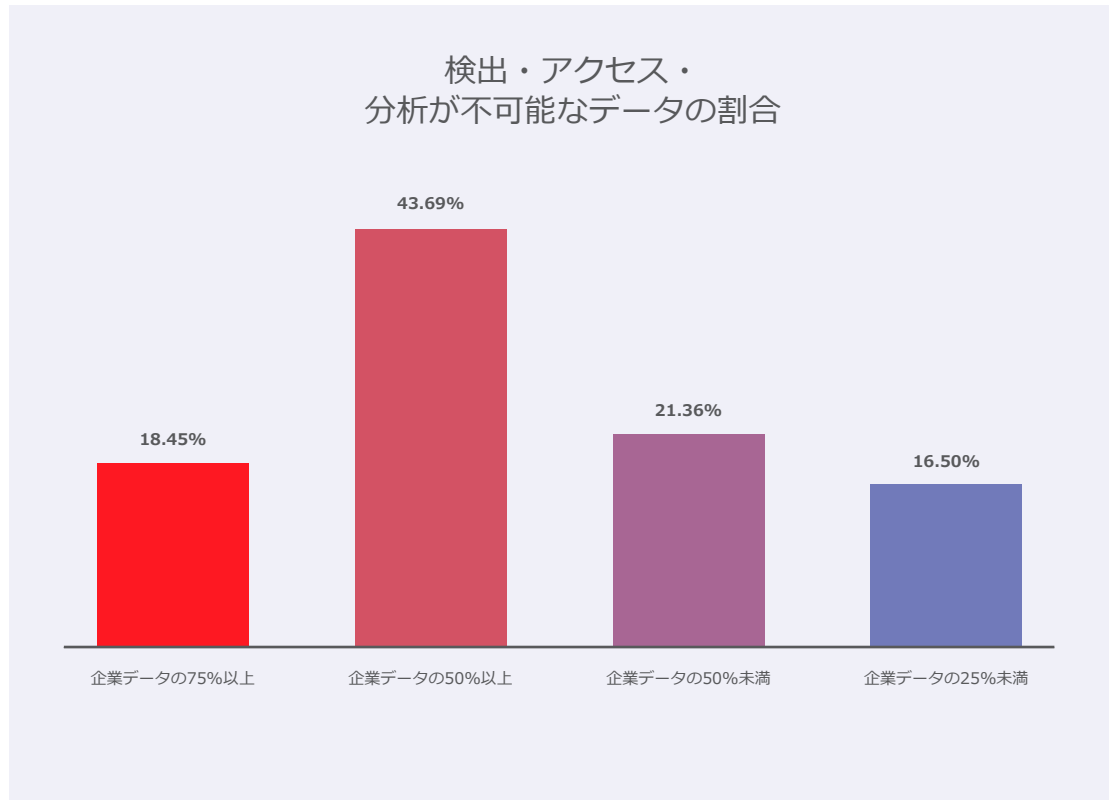
5

データ駆動型企業への壁

調査によると、クラウドテクノロジーの導入後、半数以上のデータを検出、アクセス、分析できなくなった回答者が43.7%に達します。利用できないデータが25%未満との回答は16.5%だけでした。

検出・アクセス・分析が不可能なデータの割合

62.14%の企業がデータの半数以上を利用できないと回答



1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

データ駆動型企業への壁

5 /

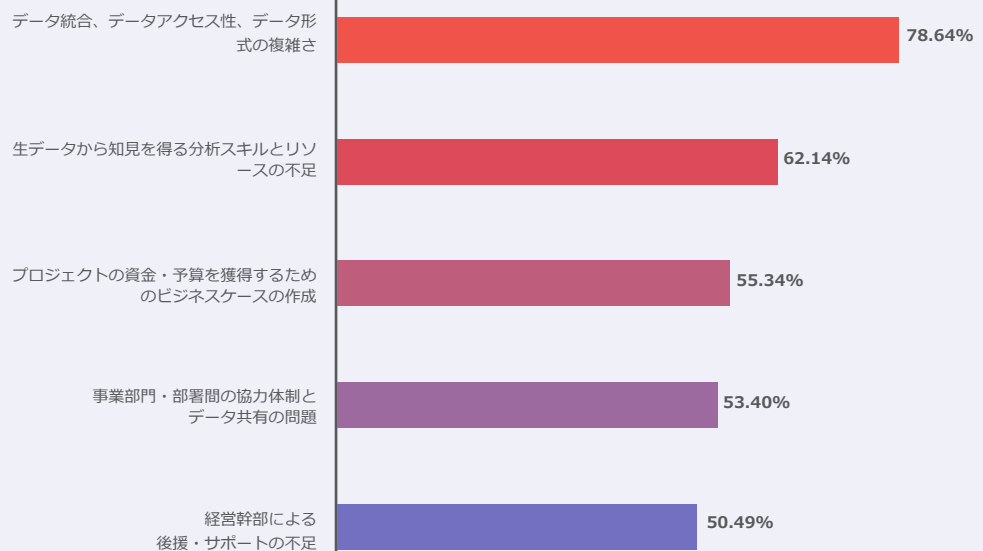
データ駆動型企业への壁

データ駆動型企业への道のりが簡単でも単純でもないことに企業は気づき始めています。この課題を数タップで解決してくれるようなアプリは存在しません。クラウドを取り入れている企業では、すでにデータの考慮事項を活用しています。しかし、データに対するビジネス関係者と技術関係者の意識を統一し、データを単なるコア資産としてだけでなく、企業DNAの基礎として見る共通理解を得ることは苦勞しています。2022年の調査に参加した企業がデータ駆動型企业に向けてどのような課題を挙げたかを見ていきましょう。

「データ統合、データアクセス性、異なるデータ形式への対応に関する複雑さ」が他を引き離してトップの回答となりました（78.6%）。また、「生データから知見を得る分析スキルとリソースの不足」も頻繁に言及されています（62.1%）。

明らかに、データ駆動型企业になるには、データ形式に関係なくデータ統合とデータアクセスを行う能力に加えて、データを活用して目標を達成し目立った変化を起こす能力が必要です。幸い、最新のデータ管理ソリューションを利用すれば、こうした課題を簡単に乗り越えられます。

クラウドデータ駆動型企业への変革に向けた最大の課題



企業はデータ統合の複雑さと、分析スキルの不足に苦しんでいる

1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

データ駆動型企業への壁

クラウドサービスとしてのデータアプローチの評価

企業や個々の利害関係者は、多様なユースケースに役立つ手段としてのクラウドに魅力を感じています。この項目では、データメッシュ、エッジ、機械学習などの重要ユースケースのうち、どれを「不可欠」や「非常に重要」と見なしているかや、現在どのユースケースを使用しているかを調査しました。

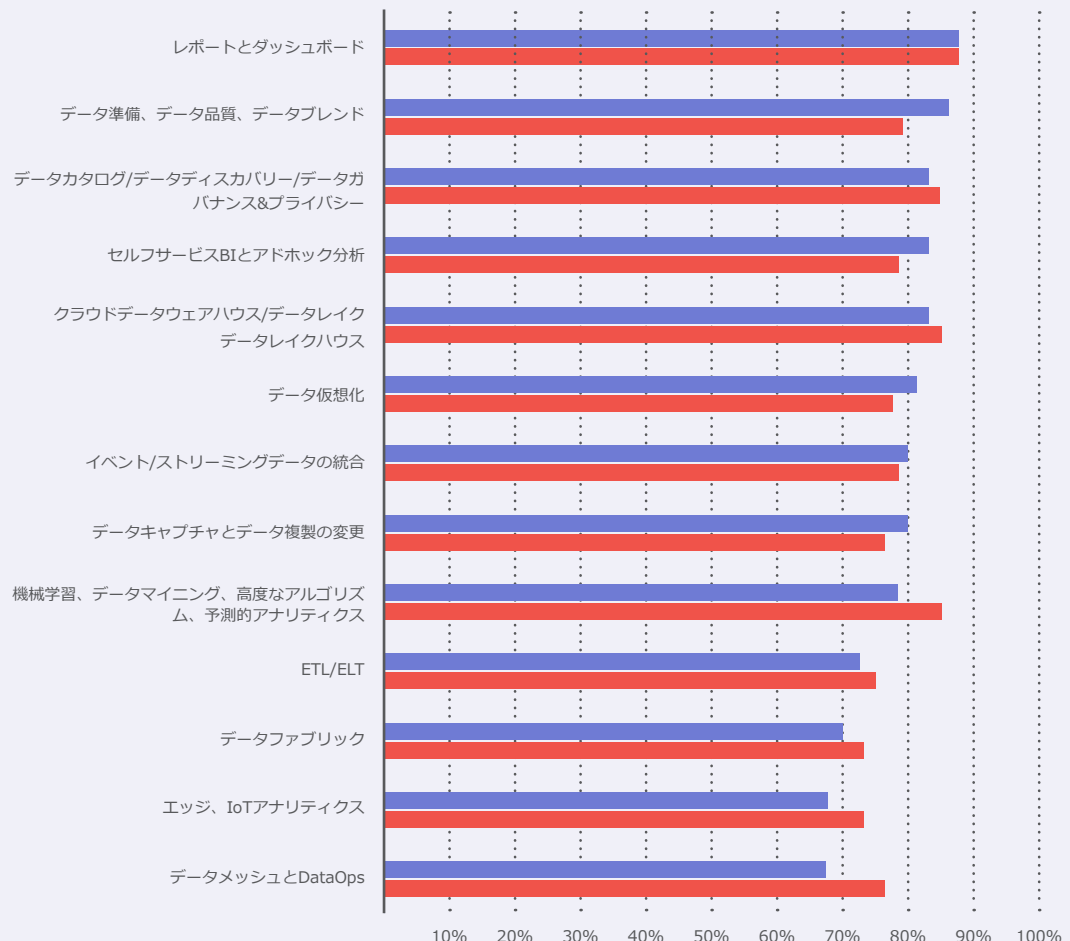
現在最も多く使用されているユースケースは「レポートとダッシュボード」と「クラウドデータウェアハウス」でした。しかし、データ仮想化、データ準備、データ品質、データブレンドへの将来的なシフトも確認できます。

この2つのユースケースは、クラウド化への取り組みに関する多くの企業の状況を如実に反映しています。1つ目のユースケースは、社内のビジネス関係者がデータを上手く活用する準備が整ったことを示すものです。また、2つ目のユースケースからは、企業がロバストなクラウドベースのリポジトリを利用してクラウドシステムの最大限の活用を計画していることが分かります。

データ管理、統合、アナリティクスワークロードの アプローチ

■ 計画 ■ 現在

現在・将来ともレポートとダッシュボードが依然として最大のユースケースだが、データ仮想化、データ準備、データ品質、データブレンドへのシフトも起こりうる



1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

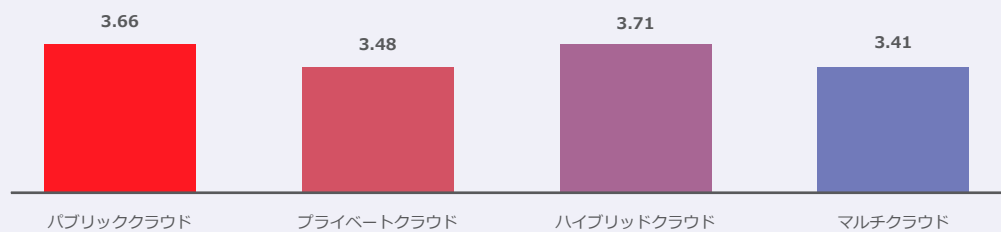
5

データ駆動型企業への壁

クラウドのデータ統合、データ管理、アナリティクスにおける可用性の重要性

私たちはリアルタイムな世界を生きています。そのため、クラウドのデータ統合、データ管理、データアナリティクスに関して可用性は単に「あれば良い」ものではなく、不可欠か非常に重要な存在であることを知っても驚きはしないでしょう。この原則はどんな構成でも当てはまり、それどころか不変的な真実のように思えます。データ関係者は可用性を今すぐ必要としており、ない場合はできるだけ早く実現するべきです。

クラウドサービスとしてのデータ統合、データ管理、データアナリティクスの重要性（加重平均）

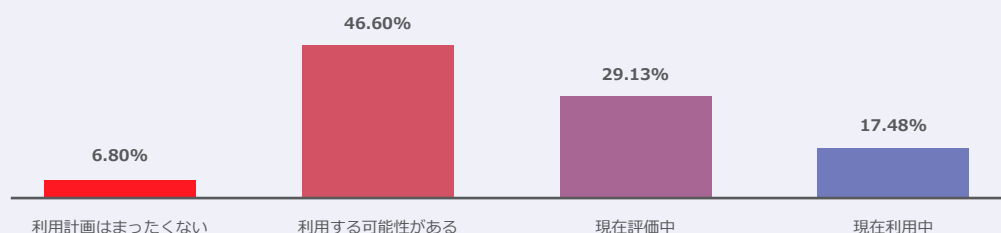


データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用計画

思い出してください。上記の「検出、アクセス、分析できないデータの量」の設問では、クラウドテクノロジーの導入後にデータの半数以上を検出、アクセス、分析できなくなった企業が多数存在しました。したがって、ほとんど（93%）の企業がクラウドベースのデータ統合、データ管理、データアナリティクスを使用中、評価中、検討中と回答しているのは当然のことです。

データ仮想化や論理データファブリックといった強力なテクノロジーを利用すれば、オンプレミスシステムとクラウドシステムの双方を対象としたリアルタイムかつシームレスなアクセスを実現できます。

データ統合、アナリティクス、管理ワークロードでのクラウドの利用状況/利用計画



1

デプロイ、プロバイダー、IT部門の役割

2

導入、動機、課題

3

主な取り組み

4

データ統合、データ管理、データアナリティクスでのクラウド利用

5

データ駆動型企業への壁

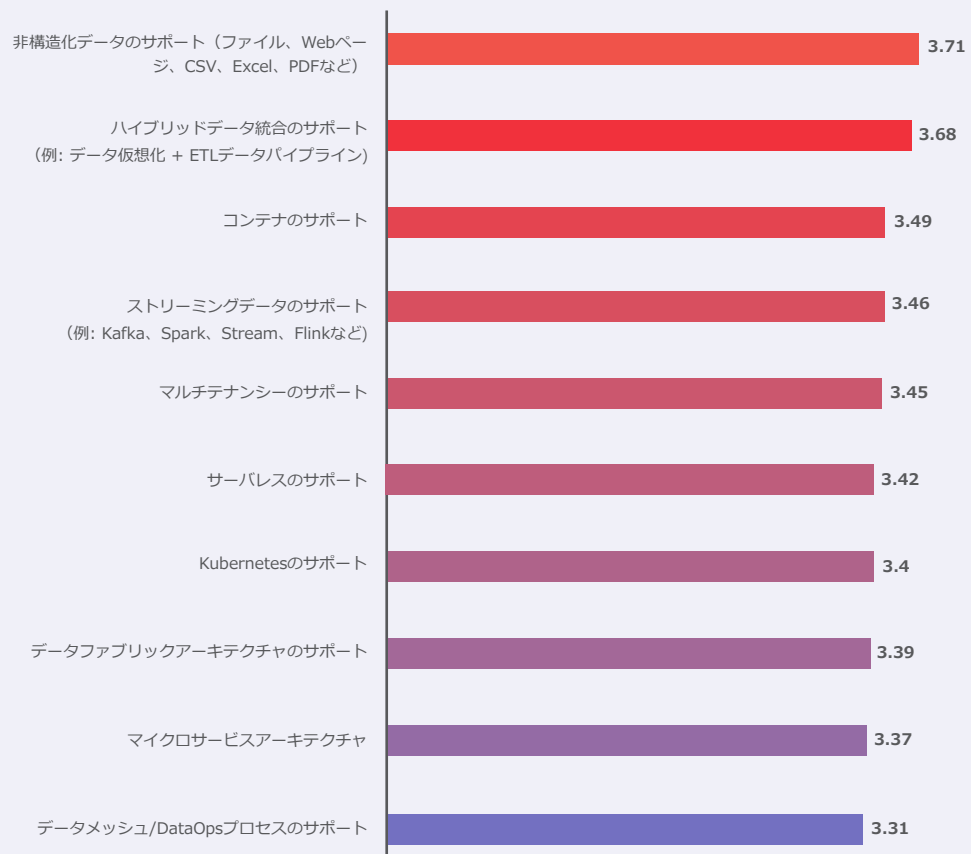
クラウドのデータ統合、データアナリティクス、データ管理ソリューションに最も求める機能

上の設問で、クラウドを採用した企業がクラウドベースのデータ統合、データ管理、データアナリティクスソリューションの活用に大きな関心を持つ段階に達していることを見ました。

では、そうしたソリューションに何を期待し、どのような機能を最も求めているのでしょうか。この設問では幅広い最新機能を提示し、希望する機能を尋ねました。データメッシュのサポート、データファブリックアーキテクチャ、ハイブリッドデータ統合のサポートなどがその例です。

その結果、最も期待されている2大機能は、「非構造化データのサポート」（60.2%が「不可欠」または「非常に重要」と回答）と、「ハイブリッドデータ統合のサポート」（57.3%が「不可欠」または「非常に重要」と回答）となりました。また、回答者の93%がマイクロサービスアーキテクチャの重要性を認めています。同様に、回答者の93%がストリーミングデータのサポートを「重要」、「やや重要」、「非常に重要」、「不可欠」だと感じています。回答者が強く求めている他の機能としては、コンテナのサポート、サーバレスデプロイ、Kubernetes、データファブリックアーキテクチャが挙げられます。

クラウドのデータ統合、データアナリティクス、データ管理ソリューションを評価する際に最も求める機能（加重平均）

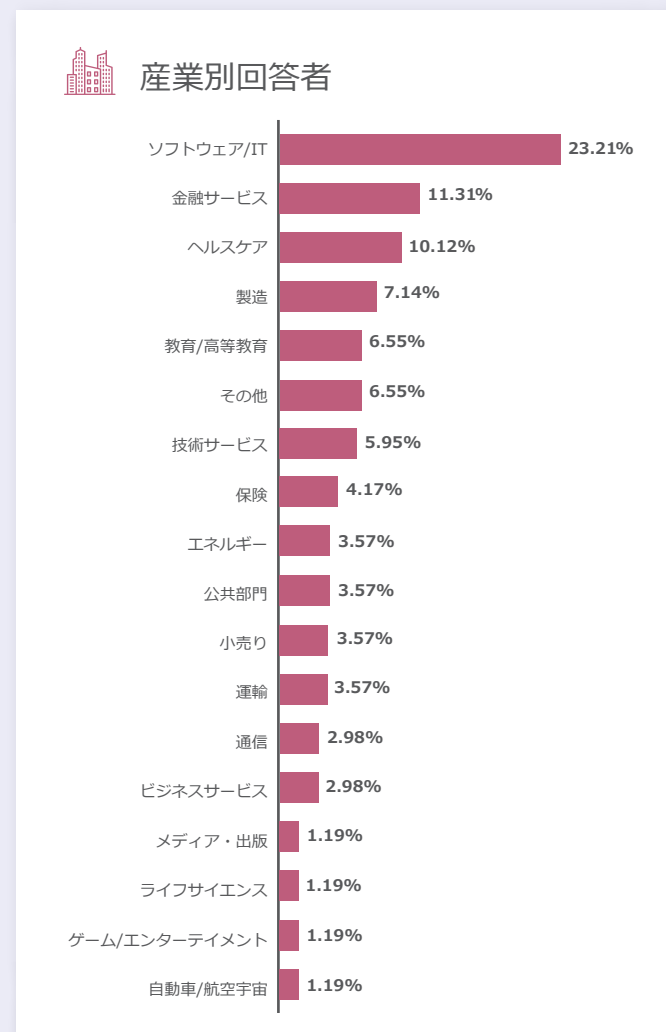
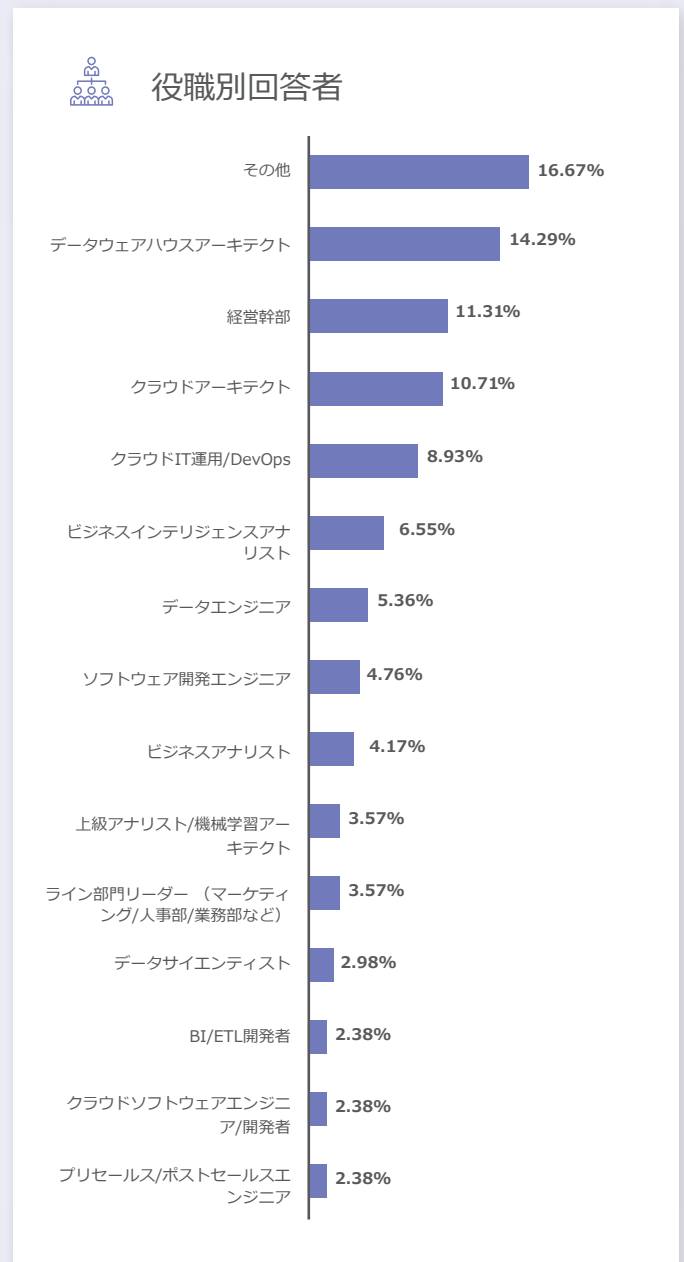
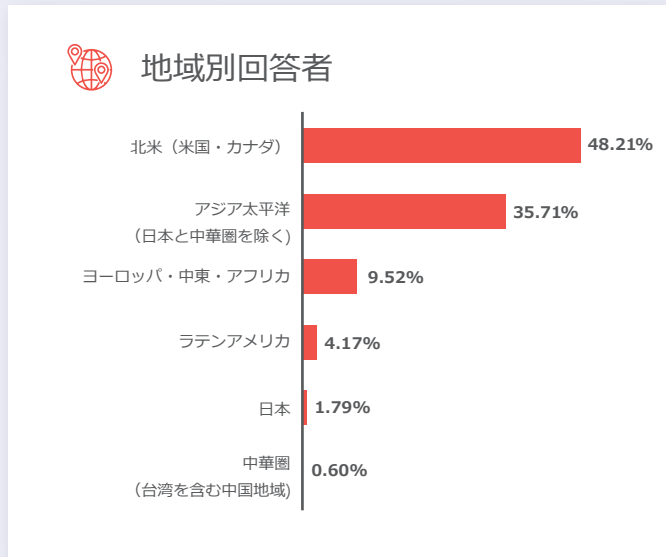


非構造化データとハイブリッドデータ統合のサポートが、調査対象者にとっての成功の鍵

調査手法

Denodoグローバルクラウド調査2022では、3つの主要国際地域（北米、ヨーロッパ・中東・アフリカ、アジア太平洋）で150社以上の利害関係者を調査しています。バックグラウンドも役職もさまざまなデータとクラウドの専門家が参加し、各自の知見を提供しました。Denodoグローバルクラウド調査2022の結果からは、クラウド化に向けた取り組みの中での各企業の立ち位置が明らかになっています。本調査は2022年3月にオンラインで実施したものです。

回答者の属性



Denodo Platformの概要

Denodo Platformは論理データファブリック、データメッシュ、データハブの構築に必要な全機能を提供する、データ仮想化を活用した業界唯一のデータ統合・管理プラットフォームです。提供できる機能としては、企業にデータを迅速に公開する共通セマンティックレイヤー機能、セマンティック検索と全社的なデータガバナンスを目的とした動的データカタログ機能、機械学習を利用した業界最先端のクエリアクセラレーション機能、マルチクラウドシナリオとハイブリッドクラウドシナリオに対応した自動インフラ管理機能、組み込みのデータ準備機能が挙げられます。こうした機能を通じて、セルフサービス分析、知見獲得の迅速化、プライバシーとコンプライアンスの改善、データ管理プロセスの自動化推進、ベンダーロックインの回避を達成できるのです。

Denodo Platformの利点

最大 65%
ETLより高速

最大 67%
データの準備時間を削減

6か月未満
回収期間

Denodo Platformのサブスクリプション

Denodo Platformでは、お客様のデータ統合とデータ管理のニーズに最適な4段階のサブスクリプションレベルを用意しております。

E+ **DENODO ENTERPRISE PLUS**
全社的な導入のため自動化機能、コラボレーション機能、高度なセキュリティ機能をさらに強化

E **DENODO ENTERPRISE**
複数のユースケースとグループを対象とし、大量のデータを扱う全社的な導入向け

S **DENODO STANDARD**
部門レベルの複数のユースケースに対応

P **DENODO PROFESSIONAL**
小規模な部門レベルのプロジェクト向け

データファブリック

AI/ML
高度なセマンティック

E+ **DENODO ENTERPRISE PLUS**

データ管理

データカタログ

E **DENODO ENTERPRISE**

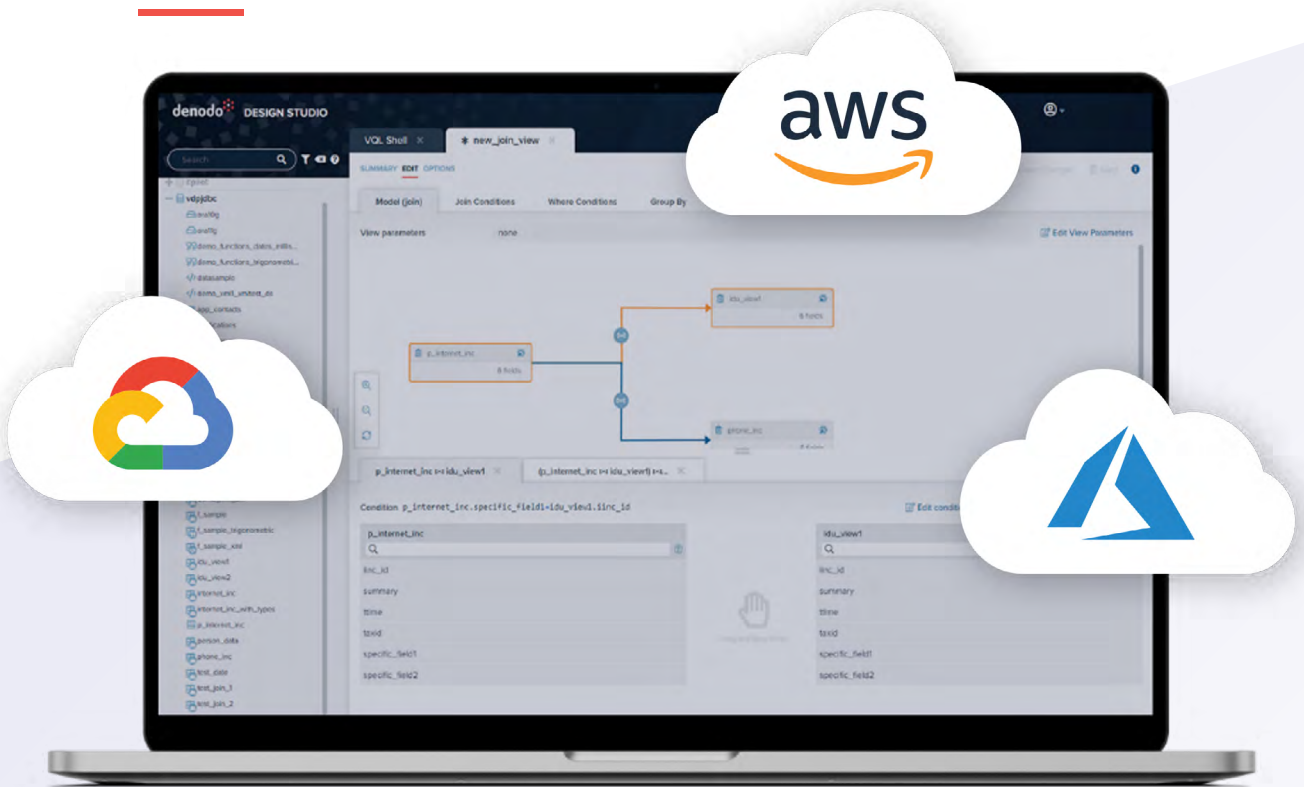
データ統合

S **DENODO STANDARD**

P **DENODO PROFESSIONAL**

Powered By
DATA VIRTUALIZATION

**AWS、Microsoft Azure、Google
Cloud Platformのマーケットプレイスから、
Denodo Professionalの30日間無料トライアル
をご利用いただけます**



無料トライアルを開始

スポンサーについて

HCL

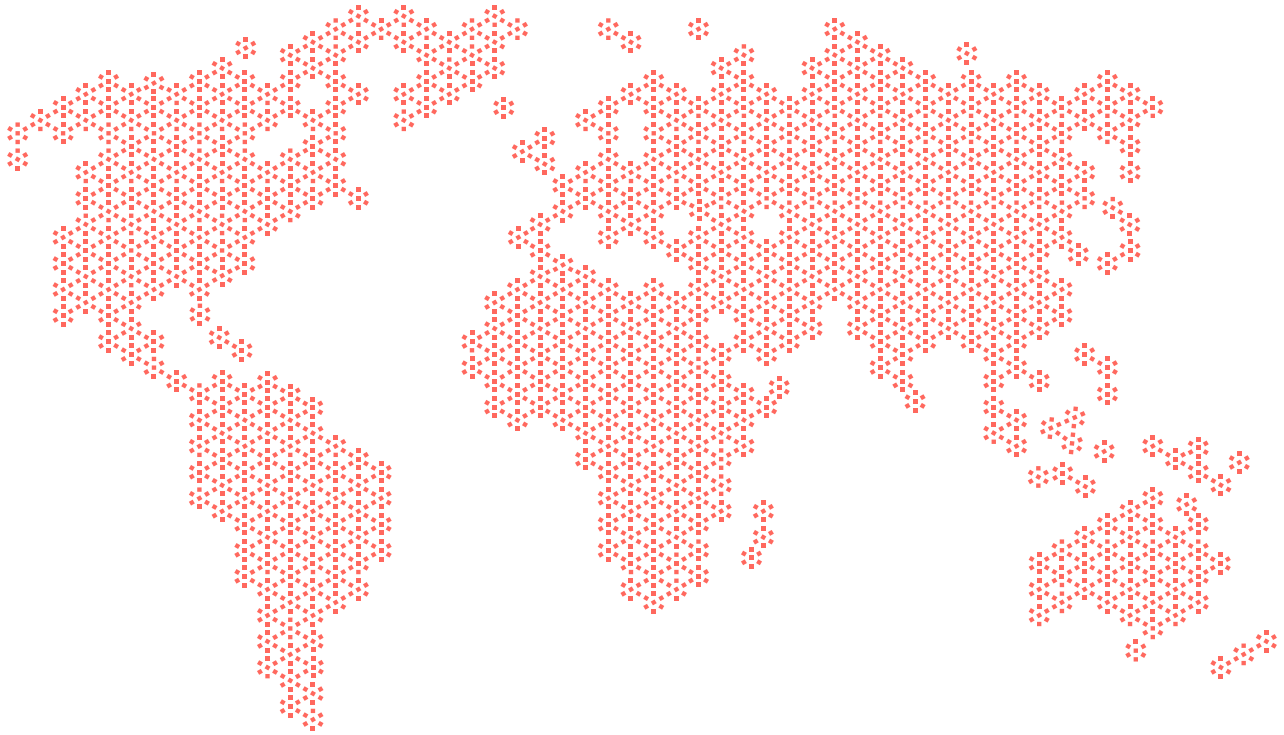
HCL Technologiesは、デジタル時代に向けた企業のビジネス刷新を支援する次世代グローバルテクノロジー企業です。同社のテクノロジー製品、サービス、エンジニアリングは40年にわたるイノベーションに加えて、世界に誇る経営理念、強固なイノベーション文化、カスタマーリレーションシップへの飽くなき追及を土台としています。Mode 1-2-3戦略を通じ、数ある分野の中からデジタル、IoT、クラウド、自動化、サイバーセキュリティ、アナリティクス、インフラ管理、エンジニアリングサービスを中心に構築された製品、ソリューション、サービス、IPの統合ポートフォリオを提供します。HCLは世界に展開したR&D、イノベーションラボ、配送センターのネットワークと、52か国209,000名の「アイデアブレナー」の力で、Fortune 500企業250社とGlobal 2000企業650社を含む重要産業の大手企業を支援しています。

Tech Mahindra

Tech Mahindraは顧客中心のイノベティブなデジタルエクスペリエンスを提供し、企業、仲間、社会の成長を実現します。同社は90か国で151,100名以上のプロフェッショナルを擁し、60億ドルの売上高を誇る企業であり、Fortune 500企業を含む1,224社のグローバル企業を支援しています。また、5G、ブロックチェーン、量子コンピューティング、サイバーセキュリティ、人工知能といった次世代テクノロジーの活用に加え、グローバル顧客を対象としたエンドツーエンドのデジタル変革の実現に注力しています。「ブランド力」評価では、世界の7大ITブランドの中で最も急速に成長しているブランドと認められました。NXT.NOWTMフレームワークを通じ、エコシステムの「人間中心エクスペリエンス」の強化と、強固な企業ポートフォリオから生じるシナジーを活用したコラボレーションによる破壊的変革の推進を目指していきます。



Wipro Limited (NYSE: WIT、BSE: 507685、NSE: WIPRO) は情報テクノロジーサービス、コンサルティングサービス、ビジネスプロセスサービスを提供する大手グローバル企業です。コグニティブコンピューティング、ハイパーオートメーション、ロボット工学、クラウド、アナリティクスなどの最新テクノロジーの力を活用し、デジタル世界への顧客の適応と成功を支援します。包括的なサービスポートフォリオ、サステナビリティへの大きな貢献、優れた企業市民活動で世界的に認知されており、240,000名のひたむきな従業員が6大陸で顧客に貢献しています。共にアイデアを見出し、点と点をつなぎ、より良い未来を築いていきます。



Denodoは、データ管理分野をリードする企業です。数々の受賞歴を誇るDenodo Platformは論理アプローチを採用した先進的なデータ統合、データ管理、データ配信プラットフォームであり、セルフサービスBI、高度なアナリティクス、ハイブリッド/マルチクラウド統合、エンタープライズデータサービスを実現します。Denodoのお客様には30以上の業種の大企業とミドルマーケット企業が含まれ、400%以上のROIと数百万ドルの効果を達成し、6か月未満で投資を回収しています。

Webサイト www.denodo.com/ja | メール info@denodo.com | コミュニティ community.denodo.com

